
王様と喪女

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王様と喪女

【Nコード】

N0653BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることだけが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとって結婚しろとはるかに迫るが……？

この小説は、すぴばる小説部にも投稿しています。

001 喪女の身の上

よし、これが打ち終わったら、すぐに家に直帰するぞ。

わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の二割り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめたただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだというのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味が睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかった。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太って見られるし、服選びは大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがったら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、ごめんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみません」

ちょうど金曜日の仕事上がり前ということもあつて、会社の営業の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわたしはせっかくのお誘いを断ってしまった。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言うてくるけど、たぶん内心では気を悪くしているだろう。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知っている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからいい付き合いができるかもしれないしね」
うっかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人に話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人わたし胸が大きいのが気に入ったらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会った方がいいのかもしれないけど、接待とか苦手だし。わたしにはお茶出しとかがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかでごまかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人にうまく対応できるとも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちよっと、いやかなりへこむかもしれない。

それでもって、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけだ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしれないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避することに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにした。

これは何度もいろんな人に言われていることだったからだ。

確かにわたしには恋人はいない。というかこの歳まで彼氏がいたことはない。

いわゆるもてない女 喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思う。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないことはなかった。

今までに異性を紹介してくる相田さんみたいな人もいたし、知り合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事なことがあったのだ。

「よし、下描きまでは完成ーっ」と

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらってOKが出たところで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下描きが予定したところまで終わりそうだったからだ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よろしかったので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやっぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。そんな自信もなかったし、ウエブ経由でいるいる人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しかし、さすがに肩こつたなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下描きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめると、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしれないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いつてえ〜っ!」

二十七の女の叫び声として、これはどうかと思うが、本当に痛いではない。

人間、とっさの時にはつい地が出てしまうものだ。

だが、原稿一式は死守。

どうあっても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまつてあるし、あんなふうに散らばることはないはずなのに。

「……おい」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさろうとした。……がなんだこれ。

「おい、やめろ！」

なぜかいかにも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

どこだ、ここは。

さっきまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、こっちはそれどころじゃなかった。

「いつたい、なに？　なにが起こったの？」

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動してくるなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うのなら海外とかにテレポート？

もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリックプってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとりあえず降ろされたわたしは、目の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やっぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失っていると、美形は「答える」と厳しく言ってきた。

目の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から来ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本を通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じゃなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています」

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻ってる。それでも通じないのか。

やっぱりここは、考えたくないけど異世界なんだろうか？

「……恐れながら」

今まで気がつかなかったけど、近くには五十代くらいのおじさんがいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルディアの最強の女魔術師がその国の出身だったかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぼかんとしてしまっただ。

……そうすると、その最強の女魔術師って、日本人なの？

「……そうか。異世界召喚だというなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だったが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルディアに問い合わせなければなと呟いた。

「……あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。……おまえはまったく行ったことのない大陸で話を通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまっただ。

アメリカに行って、日本語が通じないのと一緒にだ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

……でも、なんで召喚されたのがわたし？

こんな枯れた地味女じゃなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「……しかし、召喚されてきたのは分かったが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい!？」

美形に呻くようにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまっただ。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだったのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるって……、再発行してもらえばいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもらうわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだった。

「す、す、すみません！」

これって、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃったってことだよな。

わたしは頭を下げ、美形に謝ったけど、こんなことでは許してもらえないだろうな。どうしよう。

ちろりと美形を覗くと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言ったことで、わたしは許してもらえたのかと思って頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思ってもいなかった彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれってなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まっていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

この人がせつぱ詰まっていることは感じられたけど、やっぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそうだし、女の子もよりどりみどりそうなの。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が気の毒だ」

はい？ この人今、姫って言った？

姫って、貴族とか王族の女の人だよな？

……そんな人を花嫁に出来る目の前のこの美形はいったい何者なんだ。

「姫って……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなってくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……って、国王なんですか!？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかった。

だって、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれって言われてるってことじゃない!

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたってこと!?

是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃったり、最悪の場合、国家同士の繋がりのお金を駄目にしたってことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによってわたしはそんな人の結婚を滅茶
苦茶にしちゃったんだよーっ！

003 とりあえず着替える

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言っていないぞ」

わたしが王様に必死になって頼むと、彼は啞然とした顔になった。

「……あれ、違うの？」

いや、だってさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだった国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だったら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまったし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言っているだろうが」

わたしの言葉に対して、カレヴィ王は面倒くさそうに答えた。

いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁になんて、きつと

国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろがさつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「えええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侶なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たって、わたしはお風呂に入れてもらうことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持っていた原稿一式を奪われて、わたしはちよつと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ぜつたい、絶対だよ!!」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるといふピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまったものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るものがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になって一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。

ちよつとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなつたわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええつ、ちょっと、ちょっと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまった。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、侍女の一人に台の上へ横になってくださいと言われて、すでにやけくそになっていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちよつと酷いんだよね、と言ったらそこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さっきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、エステってこんななのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといつてもタダだし。……ここが異世界ってんじゃないなら、もつといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですのね」

侍女の一人が感心したように言う。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとう。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女もいるし、これはお世辞だろうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしにはよく分からない。みんなこんなものじゃないの？

全身マッサージも終わって、ちょっと休憩と言うことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか？

もうちよつと地味な素材はないの？ せめて着る人に衣装は合わせで欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。ちえっ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……っ！か、これを着るのか？ 普段ダラケきつた生活をしているこのわたしが？

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそうするわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だったけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

ここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあっ、ハルカ様、とってもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さっきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

004 超非凡な友人

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻らされた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だって彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑った。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になっているけど、でもやっぱり間違いない。

「ち、千花っ！？」

「はるか、ひさしぶりー。元気だったー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちよつと呆然とする。

千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元氣、元氣だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確か、結婚して外国にいるって聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だって聞いてなかった？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だっていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うっそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にかそんなことになったんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思うけどー……」

千花はそう言うと、困ったように頬に手をやった。なんとというか、どこことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだったのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きに見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思ったら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィ王とおじさんに頭を下げる。「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……

まあ、千花は友達の鼻肩目を引いてもとっても美人なだけだね。

「……それにしてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいかな違和感がある。

「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごくない？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。

「うーん、はるかにはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思う」

「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言うんだから、事実なんだろう。

でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。

向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィ王が遠慮がちにわたし達の話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だっというのに堂々としている。

ひよっとして、最強と言われるほどの魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだろうか。

さっきのおじさんもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

すごい。すごいよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合うのでさえ、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだったのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハルカが突然現れたことで、隣国のディアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になった。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだった。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりません、ディアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしということになります」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまっている。どうしたらいい」
ええ、そんなにせっぱ詰まっているの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもらうことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええっ!？

カレヴィ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待ってよ、わたしはそんなこと納得してない！

わたしは驚いて思わず飛び上がったしまった。

「えええ、千花ちよっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこうなったんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にごめんね。でも、カレヴィ王に酷いことはさせないって約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよな？

「いや、それより家に帰れないことの方が問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよな。それは残念ながらやめることになりそうだけど……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなっていく……。

「そんなあ……。わたし、せっせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはその事務員ってことにするよ。給料も今よりはるむし」

「ええっ、本当!？」

思ってもいない千花の言葉に、わたしは色めきたってしまった。

なんだ、そんなんだったら大歓迎だ。

それにしても、魔術師ってそんなことまで出来ちゃうの？

ってというか、会社設立って、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする?」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することもなく笑顔で頷いた。「ええー、それなら結婚する!」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来っこない。……ああ、この先には充実した生活が待っているんだね。

訪れるだろう近い未来を予想して、うっとりするわたしをカレヴイ王とおじさんが呆れた顔で見えていたけど、わたしはそんなことに構ってなかった。

……多少問題ありだけど、趣味に浸れるってすごく素敵じゃない？

005 子を成す覚悟

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はっと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないですし……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィ王はもう少しお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。
うん、でもまあ、カレヴィ王が言ったことはごく当たり前のことなんだよね。

形だけの王妃なんて、もらっても困るだけだろう。
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついてちゃ駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも」
わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。

「え……、はるか、本当にいいの？　もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうるたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人が出来る甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もそんな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィ王とそうなっちゃってもいいんじゃないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からない感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになってると思ってるかもしれない。

まあ、成り行きつちや成り行きだけど、結婚するんだつたら、こ
っちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよね。

「はるかがOKなら、わたしが口を挟むことじゃないよね。……で
も、なにか困ったことがあったらすぐに言ってよ？ 出来るだけ協
力するから」

千花がわたしの手を取って、それでも心配そうに言ってくる。

うん、持つべきものはやっぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくてもいいや。……
今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィ王がそこに割り
込んできた。

「……話は済んだか？ ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かつ
たぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言うと、カレヴィ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？ てつきり二十歳そこそこか……」
っていうことは、カレヴィ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じゃ嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知っているんじゃないのか？ 王妃になる
なら、清らかでなければならぬぞ」

うんまあ、そう思うのが普通だよね。

「ああ、それはないですから。わたしはとつても清らかですよー。
なんととっても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張って言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にもものすごく
微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そうか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳とい
うことにさせてもらおう。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思うけど、王妃にするにはこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言ってた男を知っている云々と言ってくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願いします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対して敬語もいらない」

今まで気が付かなかつたけど、この王様はかなり気さくらしい。

この先の人生、ずっと付き合っていかなくちやならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかった。

わたしはほっとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かった。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがな」
う、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。

「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ〜っ」

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ」

「ごめん、こればかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。うう、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそうつまい話は転がってないよね……。

そう考えながら深く溜息をついているわたしにカレヴィが言ってきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しろ」

「うん」

カレヴィからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。

カレヴィがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。

「これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばったりの政略結婚だというのに、わたしの心配までしてくれて、カレヴィなんだかかんだ言ってもいい人だなあ。

……うん、この人とならうまくやっていけるかもしれないなど、わたしは少しだけ安心した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

王様と喪女

2012年1月6日21時45分発行